〈佳作〉

小さな力で

札幌市立西園小六年
菊地　祐江

「ここも十年たったら、家がびっしりたつわね」

お母さん達は、広い草原やあき地を見ると、きまってそう言います。でも私は、こんなに広いのに家でびっしりになるなんて信じられません。

「あー、こんなところでのびのびと遊んでみたい」

そう思うのです。

私の家の近くの草原では、つい最きんまで友達ときれいな花をつんだりして遊んでいました。それなのに、ながい工事が始まり、大きな家がたってしまいました。

私は前、これとにたような本を読んだことがあります。子供達の遊び場が家をたてるためつぶされ、その子供達は、遊び場をつぶさないでくれと、市役所などにお願いにいくという内容です。でも私にはそんな勇気はありません。

緑の木や広々とした草原を見ると、とても心がおちつきます。さわやかな気持ちになります。空気中がきれいに感じられます。思いきり深呼吸がしたくなってきます。

それなのに、自然を守るために何か運動をしよう、という勇気が出てこないのです。

たくさんの人と協力すれば、私にもなにかできるかもしれない。いや、三人でも二人でも、だれか相談相手がいたなら、できるかもしれない。そんなことを毎日考え続けていました。

この前の遠足で、平和のたきにむかっているとちゅう、「採石絶対反対」かいてあるかん板がありました。そのかん板には、「左から二番目の美しい山が採石のためけずられています」と書かれていました。

見ると、本当にその山の半面がけずり取られているのです。このかん板は、個人が作ったものとみられます。私は、かん板のせい作者がすばらしいと思いました。

きっとその人は、いつもその山を見ていて、自然を守ろうという気持ちがいっぱいになったのでしょう。作った人の気持ちが伝わってくるように感じられました。

そのかん板を見ていると、以前見たテレビを思い出しました。

山をくずしているのを見て、ある一人の女の子が、総理大臣に手紙を出したのです。

「自然をこわすのはやめて下さい」と……。

私はすごいなあと思いました。私にその十分の一の勇気でもあったらいいなあと思います。もしも本当に自然をこわしたくないのなら、それくらいのことをしなければならないのでしょうか。

私は、自然をこわしたくないとは思っていながらも、自分ではなにもしていない……。そんな自分がはずかしくなってきました。「こんなことではだめだ」「勇気を出して何かに取りくまなくては」

私には大きな勇気も力もありません。でも私は、あき地や草原に自然をつくろうという願いで、自分のおこずかいで花の種を何種類か買ってきて、自然を守ろうというカードを自分の手で作り、そのカードに花の種をそえて近所にくばることにしました。

「みんなにわらわれないだろうか」「花の種を植えてくれるだろうか」と不安です。でも今、私は自然を守るための小さな運動に取り組む意欲でいっぱいです。

私がくばった種をみんなが植えて、緑いっぱいになった町を想像し、次の運動方法を考えています。小さな力でも、きっといつかは大きな自然をつくり出すことができると信じながら……。